軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート 64

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

“生産地での肢蹄管理研修に臨んで”

平成26年度軽種馬経営高度化指導研修(軽種馬経営技術指導者養成・技術普及)事業の一環として、平成26年12月10日(門別)、11日(静内)、12日(浦河)、日高地区生産者等を対象とした研修会を実施しましたので、その概要を紹介します。

講演内容

「アシや蹄を学ぼう」

最初に装蹄の目的として、蹄の磨滅防止と保護、運動器障害の改善(装蹄療法)、運動能力の向上効果を説明。次に前肢と後肢の役割、蹄下面の部位名称、蹄角質と肉質、蹄の葉状層構造、蹄の成長と生長、蹄の生長と色、正常馬の蹄の生長などの基礎的な説明を行った。歩様や肢勢の見方では、肢勢を判断するに当たっての注意事項として、まずは基準となる標準歩様・内弧歩様・一般的な外弧歩様について説明、駐立時は楽な立ち方や自由な立ち方を取ることが多いので、肢勢の判断では歩様を重視して、踏着時から負重極期を良く観察する必要があることを伝えた。前望の肢勢では、肢も膝も球節以下も真直ぐな標準・外向・広踏・狭踏・X脚・Offset Knee(膝のずれ)・球節内反・Zig_Zag(X脚＋球節内反)、後望の肢勢では、球節内反・川流れ、側望の肢勢では、後踏・前踏・湾膝・凹膝・直飛・バレリーナシンドローム・浮踵(かかとが浮いてる状態)・浮尖(つま先が浮いてる状態)などの肢勢の見方や、その特徴やリスクを説明した。Club Footでは原因、4つのGrade、浅屈腱・深屈腱の主な働き、確認の方法、発症メカニズム、罹患蹄の特徴、残存となった時のリスクや狭窄蹄矯正法を解説した。

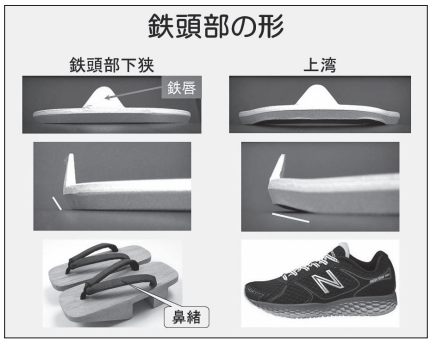
続いて、蹄機作用にふれ、その作用や意義について、JRA発行の「蹄機と装蹄」から抜粋した資料を用いて説明し、その作用を保護するための釘孔の位置、剰縁剰尾の必要性などを説明した。また蹄の水分コントロールを助ける蹄油の塗り方、1歳時に起こる膝の骨端症、蟻洞、蹄叉裂、蹄叉腐爛、挫跖、白線裂、飛節後腫などの育成期等に起こる疾病について解説。さらに屈腱炎と蹄との関連性について、栗東トレーニング・センター在籍競走馬105頭、健常肢90蹄、浅指屈筋腱発症肢51蹄の調査データの解析結果から、屈腱炎罹患蹄の特徴として、ロングトゥ・アンダーランヒールの蹄形状を挙げ、屈腱への負担増について模式図を用いて解説、また、蹄形異常を矯正する削蹄として4 Point Trimを説明した。最後に、バランスの良いアシや蹄の一例として、軽い外向肢勢、趾軸一致(繋の軸と蹄の軸が一致)、前蹄の丸みを帯びた内外対称の蹄形を紹介し、まとめでは、健全でバランスの良い肢蹄を保つことが「強い馬づくり」の第一歩であり、まさに「蹄なくして馬なし」であることを再認識させて講演を締めくくった。

質疑：蟻洞の確認方法、北海道と本州の馬の蹄質の違い、蹄葉炎の予防、蹄油を塗る時の注意点、肢軸矯正の時期、接着装蹄の長所と短所、狭窄蹄矯正法、飛節後腫の影響、浮踵や浮尖の矯正方法、蹄叉腐爛の影響、Club Footの確認や対処法、変形蹄矯正法の4 Point Trim等について質疑応答が行われた。

おわりに

今回は、育成関係者の参加が多かったことから、肢や蹄の基本的な説明に加え、各種臨床例の紹介等、幅広い分野に及ぶスライドを用意して講演に臨んだ。特に浦河では、熱心な参加者が8時近くまで残って、活発な意見交換を行った。参加者は1会場60名程度であったが、参加が低調だった理由の一つとして、肢蹄の問題については専門の装蹄師に任せっきりにしているところが多いことが挙げられる。特に育成関係者では蹄への興味が湧きにくい環境にあるが、それでも1ヵ所60人集まってくれるなら、それはそれで意義があると考えている。

今後は、参加者の興味を高めるため、飼養管理など身近で直接的な話題など、いくつかの演題と絡めて肢蹄に関する話題を取り入れるような工夫が必要なのかもしれない。また一方では、参加者の一部から「このような講習会を今後も続けてしてほしい」、「肢蹄の疾病のそれぞれについて、テーマを絞った話を聞きたい」との要望があった。



「鉄頭部の形」の説明スライド

静内研修会の様子

浦河研修会の様子